

## 農学生命科学研究科全体の取組について

中西 友子

東京大学大学院農学生命科学研究科 放射性同位元素施設・教授

農学生命科学研究科で行ってきた被災地支援研究についての報告会も今回で第5回目となります。農学生命科学研究科の各専攻ならびに附属施設の教員約40名が被災地支援研究を実行してきており、降下した放射性核種の動態が次第に明らかになりつつあります。同時に、時間と共に挙動が少し変化した部分も見受けられてきています。現在本研究科で行っている研究対象は、動植物から魚介類、水、土壌などを含め多岐に渡りますが、今回もその中からいくつかの成果を選びご報告いたします。特に、本報告会では、事故後、共同研究をさせていただき、かつご教示いただいた、果樹研究の第一人者である福島県農業総合センターの佐藤守氏を迎え、果樹汚染全体についてのお話を伺います。また、イネ研究については、精力的に現地に足を運ばれ、放射性セシウムの動態を調査されている根本圭介教授に3回目の報告をお願いしております。

調査研究が進むにつれ、次第に除染法についての検討や、漁業そのものの課題についても新しい展開が出てまいりました。これらは、溝口勝教授ならびに八木信行准教授にお話を伺います。さらに、最後は、被災地の各種生物中の放射性核種濃度から放射能の生物濃縮を調べておられる森敏名誉教授からのお話となっております。

さて、気になる環境中に存在する放射性核種の動態ですが、ご存知のようにセシウム137の半減期は30年ですから、当然ながら私たちの調査研究には長期的な取組みが不可欠です。長澤寛道研究科長のサポートの下、私たちは地道に放射能汚染についての研究を続けていきたいと思っております。

私共が今まで得てきた知見につきましては、既に4回に渡る成果報告会として公開してまいりました。これらの報告会での講演は全て農学生命科学研究科のホームページから動画としてご覧いただけます。また、来年早々には農業面における汚染研究の最初の結果を英文の本として、Springer社から世界に向けて発信する予定であります。

自然相手の長期に渡る研究ではありますが、得られた成果が現場の農業に役立つことを願って研究を精力的に進めているところです。